

キワニスドール・フェスティバル 2023

2023.5.27

日本地区と共催、オンラインで全国から参加

第14回キワニスドールフェスティバルは3年連続してオンライン方式で実施。国際キワニス日本地区との共催により全国のキワニスクラブ会員も多数加わり、参加者は100名を超えました。学校など作り手側の発表や、病院に入院中の子どもと接しているスタッフによるドール活用事例の報告に耳を傾けました。地方のクラブからは寄贈先が見つからないため在庫を抱えているという発言があり、これを聞いた出演者がドールを活用したい病院等を紹介、全国で800体ものドールの寄贈が実現しました。

田園調布学園家庭部

ボランティア活動の一つとして長年、キワニスドールづくりを進めています。型紙通りミシンで縫うところから綿詰めまで「人形を抱っこした感触を想像しながら集中して作っている」。生徒の一人は「私たちの手仕事子どもたちのお役に立っていることを誇りに思う」と話しています。ドールの存在を広く知ってもらうため、文化祭などで校内に広めているほか、外部には「SNSを活用した発信を」と提案しました。

(石村博美先生と生徒)



自由学園リビングアカデミー

生涯教育を目的に8年前に始まったシニアスクールで、学生が自主サークルとして「キワニスドールを作る会」を立ち上げました。60～70歳代を中心に25人が月1回集まり、ミシンの得意な人、綿詰めならできるという人、それぞれが得意な作業に特化する分業体制で作っています。参加者は「仕事をリタイアし、この年齢になっても社会貢献できることは幸せ」「自分たちには時間がたっぷりある、その時間を病気の子どものために役立てられてよかった」とやりがいを感じて、続けています。



聖隷三方原病院

病院での保育士の役割は、検査や処置の説明や付き添い、遊びの提供、学習支援などです。「ドールを使って手術や点滴などの疑似体験をしながら、大丈夫だよ、痛くないよと話してあげると、安心する」「子どもたちもドールで手術ごっこをしている」と病院での様子を説明。キワニスドールは「子どもたちのがんばろうとする力を引き出してくれる」。ボランティアの手作りだと知ると「親はていねいな仕上がりに驚き、子どもたちもいっそう大事にしてくれる」と紹介しました。

(保育士の山中あけみさん)



日本ホスピタル・プレイ・スペシャリスト協会 (HPS)

HPSは英国で誕生、小児医療チームの一員として、遊びを通じて病気の子どもたちを支援、日本でも227人が活躍中。キワニスドールはハイリスクの子どもに安心感を与える有効なツール。病気の子どもに限らず、親が癌で亡くなった子ども、兄弟が医療的ケアを必要とするケースも対象になります。「ドールは自分の分身。言葉で伝えることが難しくても自分の気持ちを表現するのに役立つ」「ドールを持っている他の子どもと遊びを発展させる」「虐待を受けた子どもにもドールは有効」「ヒーローが一緒だと怖くない」とたくさんのエピソードを披露。「キワニスドールを分身として愛着を持つことは、自分と向き合い、認め、理解することにつながる」「その経験は大人になってからも自信となり受け継がれる」と評価しています。子どもたちに検査や治療を説明するため、検査機器やストレッチャーを木工で作り、特別に許可を得て、それに合わせて小さなドールをつくっています。

(写真ミニドールを使った検査機器セット)
(NPO法人の同協会代表、静岡県立大学短期大学部准教授の松平千佳さん)



青少年教育賞・社会公益賞

表彰式

2023.10.13

第38回青少年教育賞の最優秀賞は「学生NGO ALPHA」。東京外語大学の学生中心の団体で、フィリピンで小学校の教室建設、オリジナル授業など教育支援をしています。優秀賞は子ども向け環境教育の「環境ロドリゲス」(早稲田大学)、ブラジルで学童健診などを実施する「国際医学研究会(I MA)」(慶応大学医学部)の両団体に。

57回社会公益賞は不登校の子ども達に居場所を提供している任意団体「なゆたふらっと」(写真は鈴木秀和代表)に贈られました。



海外からのメッセージ

キワニスドール発祥の地であるオーストラリアのほか、アメリカ、ヨーロッパからもメッセージが届きました。ベルギー・ルクセンブルグ地区では高さ2メートルを超えるドールを作成、アーティストが色をつけ、街や店舗に展示し、小児科チームの知名度やモチベーション向上、資金調達のためのPRに活用しています。



キワニスドール・フェスティバル2022 2022.5.21.

「入院中の子どもの様子」「作り手の苦勞」相互理解進む

第13回のキワニスドール・フェスティバルは昨年に続いてオンラインで開催され、ドールの作り手と、寄贈先の医療関係者、全国のキワニスクラブ会員ら80人が集まりました。

入院中の子どもたちがドールから元気をもらっている様子が紹介された一方で、オンラインを活用しながらコロナ渦の中でドールをつくる苦勞も知ることができ、作り手、使い手の双方が理解を深める機会となりました。



千葉県こども病院 チャイルド・ライフ・スペシャリスト

大橋 恵さん

検査：採血



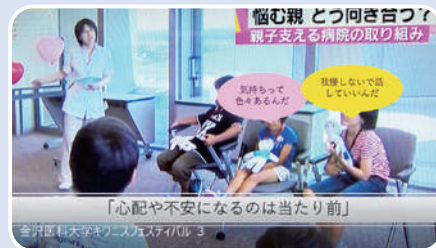
チャイルド・ライフ・スペシャリスト(CLS)は病気のこどもが直面する痛みや困難を乗り越えられるよう心理的に支援する専門職で、日本では全国35施設で49人が活躍中。

活動の内容は手術・治療への心の準備、検査・治療中の心理的サポート、治療を助ける遊びなど幅広いが、この病院ではそのすべての機会できわニスドールを使っています。例えば、ドールを病気の子どもの見立て、お医者さんごっこのようにして採血の注射や、検査などの方法を理解してもらっています。

ドールは病気の子どもの兄弟のためにも使われます。気管を切開してカニューレという管を装着した赤ちゃんが退院してくる前に、2人のお兄ちゃんには管を取り付けたドールを使って、管を引き抜いたりしないよう事前に説明。いざ退院してくると「同じだ」「大事だよ」と言いながら、家庭で妹をお世話してくれる様子を話してくれました。

金沢医科大学病院 精神神経科学 公認心理師

橋本 玲子さん



癌患者を親に持つ小学生までの子どもたちを支えるのにもキワニスドールは使われています。

子どもに親の癌をどう伝えるか、伝えないと不安も広がります。「まずドールの顔を描いて、自分の相棒にします。学習タイムでは癌になるのは誰のせいでもないことや、手術、放射線治療、化学療法などがあることを学びます。次は病院探検。治療の機械などを見て回り、多くのスタッフが助けてくれることを知ります。相棒のドールを使って点滴もやってみます」。こういう経験から親子で気持ちを伝えやすくなり、「子どもがピンチを乗り越える力を伸ばすのにドールは役立っている」そうです。

双葉の園保育園 園長・西 大記さん 園長補佐・川合 まりえさん 保育士・木崎 絵里香さん

この保育園では親がキワニスドールの洋服を手作りして、一人一人の子どもが自分のドールを大切にしています。「裁縫は学校の家庭科以来という方や、父親が仕上げたという家庭もある。何かを仕上げる、自分の作ったものを子どもがうれしそうにしてくれる、そんな時、親として幸せな気持ちになる」そうです。

子どもたちは「外で遊ぶ時も、お昼寝の時も、肌身離さずドールと一緒に」という状態。

手を洗う間もズボンの後ろにドールを挟んでいます。



西園長は「中には耳をつけてうさぎにしたり、パンダにしたりといった工夫をしている親もいる。ドールは子どもたちの心に、とてもよい栄養となっていて感謝だ」というメッセージを寄せました。

明治薬科大学

小児医療支援サークルChaid代表

山田 乃愛さん

薬剤師の仕事も小児医療の視点が必要だと考え、毎年、キワニスドールづくりに取り組んでいます。コロナ渦で例年のような教室での対面の活動が困難になったため、オンライン方式を検討しました。東京キワニスクラブの方に作り方を動画にしてもらい、参加者を募集、人数分の材料を代表が預かり、参加者の住所に一つずつ郵送する方式をとりました。「全員が同時につくるのでなく、日程をいくつか設け、ZOOMで画面を共有し数人ずつで話し合いながら作成しました」。反省点として「材料を送るのも、できたドールを集めるのも郵送だったので、時間も費用もかかったこと。縫い目や綿の詰め具合が十分でないものをやり直す作業が代表に集中してしまったこと」などを上げました。オンラインならではの苦勞をしながら、やり遂げた様子が参加者にもよく伝わりました。

キワニスドールフェスティバル 初のオンライン開催 2021.6.5

12回目を迎えるキワニスドール・フェスティバルは、初めてZOOMを利用してオンラインで開催されました。昨年はコロナの影響で中止でしたが、今年はリモートにより200名以上が参加、全国規模での意見交換ができました。

東京キワニスクラブは2001年からキワニスドールづくりを開始、毎年医療機関などにドールを寄贈しています。今回は入院している子どもたちのためにドールを使っている医療現場から、さまざまな使い方の紹介があり、ドールの意義を再認識する機会となりました。

(ボランティア活動委員会)



ドールフェスティバル 「こんな使い方も」 現場報告に参加者感動

親子で一緒にドールづくり／先に旅立つ独身の成人、自分の分身を親に遺す

・国立病院機構四国がんセンター心理支援室の井上実穂さん 「成人のがん患者さんが専門だが、お母さんが入院中に子どもが寂しくないように、親子で一緒にドールを作って不安を和らげるのに役立てています。独身で30～40代の患者さんが親を残して旅立たれるときに、自分の分身として人形をつくって置いておくこともあります」

・エドワーズライフサイエンスでドールづくりのリーダーをつとめる藤原ベティさん 「今回は寄贈先でどう活用されているかがたくさん聞いて、参考になりました。コロナの影響でドールづくりの活動は中断していますが、早く再開したいです」

・東京医療秘書福祉専門学校の成田幸恵さん 「障害児保育、病児保育をめざす学生と授業の中でドールづくりをしています。たくさんの方からドールの必要性、重要性を教えてくださいました」

・国際医療福祉大学の医学生・山田真萌さん 「小児病棟で学習支援や遊び相手のボランティア活動をしているサークルに参加しています。ドール活用の広がりに驚きました。今回学んだことを私たちの活動にも生かしていきたい」

・終了後のアンケートでは、参加者の73%が「ドールをもっと広めたい」と回答。

「ドールの使われ方が多岐にわたることにびっくりし、感動した」「コロナ渦でもドールが必要とされていることが実感できた」「各種専門職との連携がドール拡大の可能性を感じさせてくれた」「改めてドールづくりをしてみたいと思った」といった感想が目につきました。



6歳男児がドールに描いた
鬼滅の刃の煉獄さん
(亀田総合病院提供)



ドールづくりを続けている田園調布
学園の高校生も参加した

キワニスドールで「作り手」も「もらい手」もニッコリ

キワニスドールフェスティバルin大手町パソナ 2019.7.6

キワニスドール寄贈先病院、ボランティアのみなさんなど、総勢約110名もの参加者が集いました。ご参加下さった皆様、ありがとうございました。ドールを活用したい医療機関やご家族の皆様、お気軽に事務局へご相談下さいませ。

(ボランティア委員会)

<第一部 トークセッション>

地域医療振興協会の地域看護研究センター・センター長 朝野春美さん
「とちぎ子ども医療センター」における様々なドール活用の事例。

「エドワーズライフサイエンス(株)」社長室・藤原ベティさん
「キワニスドールづくりの意義や社員の意識の変化」について。

<第二部 ドール作り体験>

白いドールができあがると、みんな
ニッコリ。



誰もが笑顔に!

キワニスドールを作る会

病気の子ども達の不安を和らげるため、キワニスドールを制作贈呈しています。
(子ども達に好きな絵を描いてもらい、治療の説明の時などに使用します。)



東京医療秘書福祉専門学校



- 2.8 東京医療秘書福祉専門学校
- 2.19 東京こども専門学校
- 2.27 3.1 3.4 3.5 大妻中野高等学校
- 3.12 アストラゼネガ株式会社
- 3.22 西松建設株式会社・戸田建設株式会社
- 5.18 田園調布学園土曜プログラム
- 5.23 株式会社ジェーシービー

新規寄贈

- 3.26 独立行政法人地域医療機能推進機構
(JCHO)東京新宿メディカルセンター



株式会社JCB



アストラゼネガ株式会社



東京新宿メディカルセンター



西松建設株式会社・戸田建設株式会社

キワニスドールフェスティバル

日時: 2019年7月6日(土) 13:30~

会場: パナソグループ

JOB HUB SQUAERE (大手町・日本ビル)
2階 ホール

キワニスドールをつくる会開催企業・学校のボランティア・寄贈先医療機関、そしてキワニスクラブの会員が一堂に会し、交流を図る機会です。是非ともご参加ください。お申し込みは東京キワニスへ(6/28〆切)

キワニスドール・フェスティバル開催 2018.7.21

今年は7月21日(土)13:30～17:30に開催され、大変盛況でした。

以前は別々に開催していた「キワニスドール・シンポジウム」と「ドール作り」を同日に併せて行うかたちに変更し、今回で3回目になります。年々参加者が増えて、今回は138名もの大勢の方々(2年前は90名)が、猛暑のさなか集まりました。

キワニスの東京、埼玉、千代田、福井、沖縄各クラブの会員と家族のほか、JUNKO ASHOCIATION やサークルK 武蔵野大学の学生、企業・学校など外部奉仕団体の皆様が大勢参加。会場は、協賛の(株)パソナグループ・本社会議室をお借りし、また同じく協賛のサッポロホールディングス(株)からは参加者への飲み物を提供して頂きました。

最初に、増田好平会長の挨拶があり、続いて、病院でドールを活用しているの方々から、ドールと子どもたちとの関わりやエピソードの報告がありました。初めに、亀田総合病院の看護師の鈴木萌水様と須金舞子様から、続いて聖路加国際病院のチャイルド・ライフ・スペシャリスト(CLS)、三浦絵莉子様から、それぞれ映像を紹介しながら興味深い事例が紹介され、熱心な質疑応答もありました。

報告の中で印象的だったのは、三浦様が米国に留学し取得したCLSという、病気の子どもの心理的なケアの専門家の資格(認定試験あり)を擁する病院が米国



に多いのに対し、日本にはごく少数にとどまり、活用されていないとの話や、亀田総合病院では、ドールが登場する紙芝居を子ども達に見せてからドールを渡すと、子どもはドールにすぐに親しんで抱き抱え、手術への恐れも大きく和らいでいる、等々。興味深い話が続き、参加者も熱心にメモを取っていました。

ドールづくりに先立って、武蔵野大学のサークルK「CONNECT」が作成したドールづくりの手順解説のビデオ放映があり、ドールづくりに役立ったようです。

会の終わりには、交流会が立食パーティーのかたちで行われ、参加者の意見交換や親睦の場となりました。ドール作りの時間を設けたことと相俟って、参加者が受け身でなく積極的に参加意識を持てる会合になったと思われ、盛況の大きな要因だったように思われます。

今後ともこのフェスティバルが続き、キワニスドールがより広がりを見せ、有効に活用されていくことを期待致します。

(ボランティア活動委員 重成 侃)



2017キワニスドール・フェスティバル

2017.5.20

5月20日(土)14時より「2017キワニスドール・フェスティバル」が大手町パソナグループ本部会議室で開催されました。キワニスドールをつくる会、寄贈先医療機関、キワニスクラブ等から約130名が参加し、開始前に会場は満席となりました。

山口知子副会長の開会挨拶後のトークセッション「子ども達とドールのふれあいエピソード」では、癌研有明



病院、日本大学病院、国立がん研究センター中央病院の看護師、保育士、子ども療養士の方が、医療現場でキワニスドールが使われている実際の様子や子ども達の反応について、スライドを使ってわかりやすくご説明してくださいました。日大病院では、キワニスドールセットという透明なプラスチックボックスに、ドールやペン・クレヨンを入れて、入院時にお渡しするということでした



が、お子さんの入院生活がまさにドールとともにスタートする様子が臨場感いっぱいにも語り、辛い経験の中にもドールが癒しの役割を担っているのだと小さな感動を覚えました。

また、今年2月に入会された鈴木健次郎会員からは、米国ワシントン駐在時代に、3才のお嬢様が骨折したときのキワニスドールとの出会いについてご紹介いただきました。現在は順天堂大学でお医者様をされている麻衣さんからは、骨折患部のギブス装着中、いつも片手にロリーチャンと名付けたドールを持っていたこと、柔らかいドールの感触と共に骨折を乗り越え安堵感を持たせたこと等をお話いただき、大いに感動いたしました。ご両親もドール効果にはたいへん感謝されたということでしたので、ドールがお子さんだけでなくご家族にも癒しの効果をもたらすということを改めて思いました。

休憩後のドールづくりでは、キワニスドールをつくる会をご支援いただいているナーレの会、小さな天使等の皆様にもお手伝いいただき、多くの参加者がドールを完成することができました。アンケートには、活用事例を踏まえてドールづくりすることは意義があり、今後もドールづくりに参加したいという回答が78%にものぼりました。

私は今年の入会ですので、ドールづくりは二度目、そしてこのフェスティバルは初めての参加でしたが、キワニスクラブの社会貢献・ボランティア活動の源ともいえ

るキワニスドールの活動を誇りに思い、広めていきたいと改めて思いました。

今回、会員一同の協力体制のもと、キワニスドール・フェスティバルを成功裏に開催できたことで、準備期間からのやりとりを振りかえり、東京キワニスクラブの底力を再認識いたしました。

(高山温子ボランティア活動委員)

電気新聞 2017年(平成29年)6月1日(木曜日)

病気の子どもを支援 東京キワニスクラブ 都内で人形作りイベント

入院中の子どもに対する治療の説明、親元を離れる不安の解消などに使われる人形「キワニスドール」に関するイベントがこのほど、都内で開催された。東京電力OBら企業関係者も参加する単位「東京キワニスクラブ」が主催した。一般ボランティアや協賛企業などから100人以上が参加。どのように人形が役立つのか現場の話を共有したり、実際に人形作りを体験したりした。

当日はトリクセッションと題し、医療現場で働く看護師や医療士など、子どもが登壇。子供と人形のふれあいイベントや子供が人形をもつた際、どのような反応をするか参加者に説明を行った。登壇者は、キワニスドールを「子供にとって一緒に頑張れる同士の保護者との駆け橋」と表現し、参加した医療者へ感謝の意を示した。その後、参加者は人形作りを実際に体験。前もって人形の形にかたどられた生地、50%の綿を詰め込み、開口部を縫って完成させる。東電OBで、キワニスドールとして活躍する星利樹さんらも指導役として参加。早い人は30分ほどで完成させていた。

